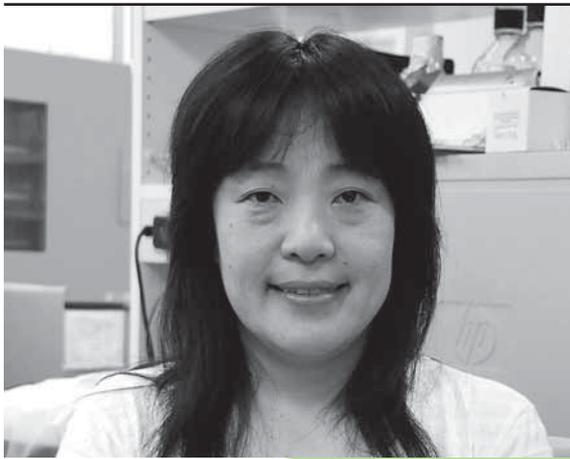


●プロフィール

- 1987年 東北大学農学部農芸化学科卒業
 1989年 東北大学大学院農学研究科博士課程前期修了、農学修士
 森永乳業(株) 生科学研究所勤務
 1996年 Johns Hopkins University, School of Medicine 大学院卒業
 Ph.D (理学博士)
 1996年 NIH, Cold Spring Harbor 研究所にてポスドク
 2002年 熊本大学発生医学研究センター COE リサーチアソシエイト
 2006年 熊本大学発生医学研究センター 再建医学部門 器官制御分野 助教
 日本分子生物学会 会員



研究を楽しみ、男女で相互をサポート。

自分も何か人の役に立てるのではないかと憧れた研究者の道

ごく幼い頃に、北里柴三郎や高峰譲吉の偉人伝を読みながら、研究者に漠然とした憧れがあったという斉藤さん。大学入学の頃はバイオテクノロジーが脚光を浴びており、応用的な研究で何か人の役に立てる技術や知識が得られるのではないかと考えたのが研究者を志したきっかけという。

進学した東北大学農学部では、水野重樹先生の研究室に入り、ゲノム構造とDNAの転写調節のメカニズムを解明する研究を学んだそうです。

そして現在、熊本大学の発生医学研究センターで、発生・分化に関わる遺伝子発現調節機構と、細胞核構造の仕組みや機能をテーマに研究が続けられています。少女の頃の想いと裏腹に最先端サイエンスの研究をする斉藤さんだが、「どんな小さな実験でも思わぬ結果が出たり、また予想通りの結果が出たりすると、とてもウキウキしながら家に帰るんですよ」。

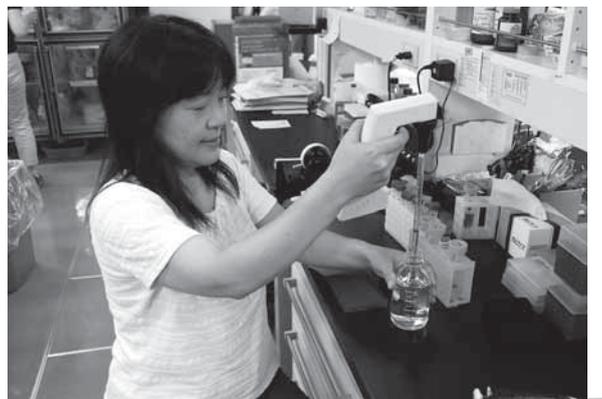
生まれたばかりのひよこが初めて見た、共に分かち合う子育て。

ジョンスホプキンス大学院では、たくさんの女性教授や学生達が研究に専念する姿に驚いたそうです。夫も研究者である斉藤さんと同じようなシチュエーションはめずらしくなかったといいます。染色体の権威で恩師であるビル・アーンショー先生は奥様が研究者で子育て中。当然の如く分担して子育てするその姿に、それが特別なことではなく当然という姿を見て、生まれたてのひよこが初めて見たものを親と思うように、研究者として生まれたばかりの頃に、深い感銘を受けたといいます。「サイエンティストを志すことを励まし、研究者として扱い、育てて下さった先生に感謝していますし、その姿勢に大いに影響を受けました。日本でもそんな生き方が受け入れられる時がくるし、私たちが後に続く人たちのためにつくっていかねばと思います」。

そしてもう一人忘れられないのがアン・プルータ博士という女性ポスドクの存在。大学院在学中に、不安を持つ斉藤さんに親身になりアドバイスをしてくれたそうです。念願のPh.Dを取得したときにお礼をいう斉藤さんに向かって彼女は「私があなたにしたことを、今度はあなたが若い人達に対してする番よ」といったそうです。斉藤さんは今「なんて大きな課題をもらったのだろう」と思うと同時に、それに答えるように学生たちを指導するように努力されています。

子育てと研究の二つの楽しみを持てることに感謝

現在中学生の娘さんがいる斉藤さんですが、「娘たちは男女同等にと教育されてきています。女性も恥ずかしがらずに宣言すれば、思う方向にも進みやすいし助言も受けられます。明確な目標を持つことが大切です。夫、父母達の理解と多大な協力のおかげで、子どもを育てる楽しみと研究の二つの楽しみを持てることに感謝しています。今、男女共同参画が進められてきています。女性が今までとは違った、楽しみながら研究ができる環境と男性と女性が補完し合った新しい生活様式が生まれると思います」。



研究室にて実験中